



TITLE:

# The Winter's Tale における神聖家族 : "'Tis Grace Indeed

AUTHOR(S):

竹村, はるみ

---

CITATION:

竹村, はるみ. The Winter's Tale における神聖家族 : "'Tis Grace Indeed. Zephyr 1994, 8: 99-114

ISSUE DATE:

1994-11-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/87545>

RIGHT:

# *The Winter's Tale* における神聖家族: “’Tis Grace Indeed”

竹村 はるみ

——母はたしかに、キリストにおいて生かされ、肉からときはなたれる以前においてすでに、その信仰と行状とにおいて御名が讃えられるような、そういう生活を送っていました。—— 聖アウグスティヌス『告白』

Shakespeare 劇に描かれる夫婦・家族に関する研究は、フェミニスト批評の発達と共に近年ますます注目を集めている。1970年代のフェミニスト批評が結婚と性をめぐる男女の葛藤を主に精神分析的に解釈したのに対し、1980年代からは当時の社会における家族観との関連が重要視されるようになってきた。<sup>1)</sup> その際に頻繁に論じられるのが、家庭における男性の絶対的権威と女性の服従を説く家父長制の概念である。個性的なヒロインや男装の演出などにより伝統的な女性観がしばしばくつがえされるにもかかわらず、Shakespeare 劇の最終的なねらいは男性中心社会の理念を強化することではないかという解釈がある。貞淑・寡黙・従順を女性の美德として理想化した初期近代の英国社会の通念と、夫や恋人のために進んで犠牲になる Shakespeare のヒロインの人物像を重ね合わせ、作品を貫く家父長制擁護の精神を解明するのがフェミニスト批評の主流になりつつある。<sup>2)</sup>

しかし、歴史、とりわけ女性史研究の分野においては Shakespeare 批評における家父長論の人気とは逆の傾向がうかがえる。むしろ、女性に対する家父長制の圧力の実態が再検討され、現実のルネサンス女性は、我々が思うよりはるかに家庭の中で重要な役割を担ったのではないかとの肯定的な見方が強まっているのである。その根拠の一つとして挙げられるのが、プロテスタントが奨励した家庭での宗教教育において女性が発揮する影響力の大きさ

である。<sup>3)</sup> プロテスタントは、教会の権威を個々の家庭へと移行させ、家族単位で行う宗教的営みを高く評価した。結婚と家庭は精神修養の基盤とされ、夫と妻が協力して築く信仰心に根差した家庭生活が、当時の道德家や聖職者により推奨された。近年、この家族の精神的なつながりを重視する「神聖家族 (spiritualized household)」と呼ばれる概念が「家父長制 (patriarchy)」と対照され、夫・子供の精神教育に心を配る敬虔な女性たちがクローズアップされるに至っている。

女性に対してこうした硬軟の立場を使い分けた16、17世紀の婚姻論を如実に反映していると思われるのが、Leontes の嫉妬に始まる家庭の崩壊と再興を描いた *The Winter's Tale* である。この劇における女性の立場に関する評価は、フェミニスト批評家の間でもいまだ一致していない。非道な夫が懺悔の後に改心し新しい女性観を獲得することを考えれば、*The Winter's Tale* は家庭における女性の復権を主題としているように思われる。Carol Thomas Neely は、“Here, for the first time since those comedies, women use wit and realism in the service of passion to mock male folly, to educate men, and to achieve a fruitful union with them” と述べて、女性の勝利を絶賛している。<sup>4)</sup> 一方、Peter Erickson は、“*The Winter's Tale* enacts the disruption and revival of patriarchy” と述べ、家父長制が抵抗を受けながらもより穏健な形態で根付いていく過程に注目している。<sup>5)</sup> 本稿は、近年関心が高まっている神聖家族の理念をふまえながら、*The Winter's Tale* に表される夫婦・家族の理想像を再考察するものである。劇のキリスト教的要素は繰り返し指摘されているにもかかわらず、それが家族像との関連で論じられることはあまりなかった。<sup>6)</sup> 劇の墮落と救済の構図を家族・夫婦の枠組みでとらえ、そこで妻たちが果たす役割を検証していきたい。

## I

*The Winter's Tale* は、シチリア王 Leontes の宮廷に親友であるボヘミ

ア王の Polixenes が滞在するという設定で始まる。まず冒頭で、二人の宮廷人が Leontes と Polixenes の友情を称え、両国の繁栄を願う。続く 1 幕 2 場で、Polixenes も Leontes と共に過ごした幼少時代を懐かしげに回顧し、Leontes の妻の Hermione に語って聞かせる。

Pol. We were as twinn'd lambs that did frisk i' th' sun,  
And bleat the one at th'other: what we chang'd  
Was innocence for innocence: we knew not  
The doctrine of ill-doing, nor dream'd  
That any did. Had we pursu'd that life,  
And our weak spirits ne'er been higher rear'd  
With stronger blood, we should have answer'd heaven  
Boldly 'not guilty', the imposition clear'd  
Hereditary ours.

Her. By this we gather  
You have tripp'd since.

Pol. O my most sacred lady,  
Temptations have since then been born to's: for  
In those unfledg'd days was my wife a girl;  
Your precious self had then not cross'd the eyes  
Of my young play-fellow. (I. ii. 67-79)<sup>7)</sup>

Polixenes の最初のせりふが、人類の原罪と楽園追放を暗に意味していることは、繰り返し批評家によって指摘されている。Polixenes は、自分と Leontes があのまま無垢な幼少時代を送っていたら、アダムとイヴより受け継がれた原罪をも免れただろうにと言うのである。墮落前の人間の象徴である楽園への憧憬はルネサンス文学に珍しいことではないが、この場面の特徴は、Polixenes が夢想する楽園で戯れるのは二人のアダムであるという点である。女性の姿は奇妙にも除外されている。一見牧歌的叙情に満ちた言葉の裏に潜む毒は、Polixenes がさらに続けて楽園の喪失を妻や Hermione の責任に帰するところでより明確になる。Hermione の問いかけに続く

Polixenes のせりふは、矛盾する女性像で成り立っている。Hermione は、「清らかな妃」“most sacred lady” と呼びかけられる一方で、夫を墮落へと導く「誘惑」“Temptations” と同一視されているのである。宮廷人特有の女性賛美のレトリックと、男性を罪の道へと誘い込むイヴの末裔として女性性を位置づける misogyny（女嫌い）の伝統が読み取れる。<sup>8)</sup>

Polixenes のせりふに見る女性観は、結婚に対する伝統的な不信をも露呈している。女性との恋愛、とりわけ性行為が男性を神への愛と信仰から遠ざけるという見方は当時のキリスト教世界に深く浸透していた。<sup>9)</sup> そして、性行為が精神的墮落の原因になるという考えは、結果として結婚及び女性に対する恐怖心を植え付けることになった。中世カトリック教会が結婚よりも独身生活をより神聖なものとしなしたことにこうした結婚観の一端がうかがえる。例えば、当時の典型的な反結婚主義文学の中で、次のように女性と結婚は信仰の敵として表わされている。“Let vs heare Salamon . . . who speaking of a Woman, saith, that he found her more bitter than death it selfe, that she is the occasion Man rebelleth against God, and counselleth vs not to liue or to conuerse with her . . . .”<sup>10)</sup> さらに、古代ローマ法においては女性は男性の性欲の犠牲者として扱われたのに対し、中性の教会法学者は女性は男性よりも生来性的に貪欲であるとの見解を取った。<sup>11)</sup> このため、女性の性というものを墮落と結び付けて嫌悪する風潮が生じたわけである。姦淫を防止する手段として捉えられた結婚が一方で肉欲への誘惑の源と判断されたのは、明らかな矛盾であった。Polixenes の幼少時代の回顧は、結婚と清純な魂の両立をめぐる当時の複雑な価値観を反映していると言えよう。

Polixenes は、恋愛・結婚の「強い情熱」“stronger blood”、すなわち性的な側面に囚われており、それが結婚生活のもたらす精神的穢れへの連想と潜在的な恐怖の原因になっている。これは、Hermione と Polixenes の不義密通という疑惑に突然取り付かれる Leontes の結婚観にも共通している。息子 Mamillius の純真無垢な姿を前にして、Leontes は Polixenes と同様

に自分の若い頃を懐かしむ。そして、Polixenes が結婚をその無垢な時代の終焉と考えたように、Leontes も結婚生活を幼少時代の純潔と対比させて現在の自分を嘆く。Leontes は、不貞に「感染した」“infected” (I. ii. 305) 妻により、「閨のシーツの純潔と白さ」“The purity and whiteness of my sheets” に「しみがつく」“spotted” (I. ii. 327-8) ことを恐れる。ここでも、結婚の性は穢れの誘因として認識されるのである。

Polixenes や Leontes が、結婚と魂の墮落を切り離して考えることができないのに対して、Hermione は夫 Leontes との会話で全く対照的な婚姻観を語っている。Polixenes と Hermione の会話に加わった Leontes は、Hermione が自分の求婚を承諾した時の様子を次のように回想する。“Why, that was when / Three crabbed months had sour’d themselves to death, / Ere I could make thee open thy white hand, / And clap thyself my love” (I. ii. 101-4) Valerie Traub が指摘するように、ここで用いられている“death”や“open”という語は、性愛のイメージを表している。<sup>12)</sup> これに対する Hermione の答えは、“’Tis Grace indeed” (1. ii. 105) というものである。いささか突飛とも思えるこのせりふは、Hermione 自身が“Grace”、即ち神の恩寵の権化であることを示していると従来解釈されてきた。<sup>13)</sup> しかし、Hermione がここで神の恩寵と形容しているのは自分自身のことではなく、Leontes との結婚であることにもう少し留意する必要がある。このやりとりで重要なのは、Leontes と Hermione の結婚観のずれである。Leontes が求婚と結婚をエロティックに描き出してみせるのに対して、Hermione は夫の言葉の性的なニュアンスには少しも気付いていないように受け取れる。それどころか、結婚は単なる男女の交わりではなく神の恵みによるものであると示唆しているのである。

結婚を神聖視する Hermione の考えについては、16世紀から17世紀にかけて盛んに出版された結婚に関する指南書の影響がうかがえる。先に述べた中世教会の独身上主主義に対抗して、16世紀には結婚礼賛が先ず北方ヒューマニストによって提唱され、後にプロテスタントによって受け継がれていっ

た。プロテスタントが推奨したキリスト教的結婚論は、単に結婚を神意によって定められた崇高なものとして扱うだけでなく、結婚によって築く家庭に宗教の基盤を置いた。神への信仰に支えられた家族が理想とされ、祈祷や賛美歌を歌うといった日々の宗教的な活動を家族で行うことが推進された。家庭は「神の学び舎 (God's seminary)」として、宗教体験の中心的役割を果たすようになったのである。そして、従来の結婚の第一目的である出産による「家」の維持に加えて、宗教を媒介とした夫婦、親子の精神的なつながりにも重点が置かれるようになっていった。<sup>14)</sup> C. L. Barber は、“he [Shakespeare] dramatizes the search for equivalents of the Holy Family of Christianity in the human family” と述べ、悲劇において顕著な神聖な家族に注目している。<sup>15)</sup> Barber はこれを “post-Christian situation” と呼んで Shakespeare 劇の宗教性を否定しているが、聖家族への志向は当時の社会風潮と密接に関連しており、その宗教的意義を無視することはできない。神への信仰に支えられた家庭——神聖家族の提唱は、妻の理想像にも修正を加えることになる。貞淑・寡黙・従順に加えて、敬虔であることが良妻の条件となっていった。<sup>16)</sup> 雄弁で知られた聖職者 Henry Smith は、“our Spouse must bee like Christs spouse, that is, graced with gifts & imbrodered with vertues, as if wee did marrie Holinesse herselfe” と述べ、信心深い妻を誇張ともとれる表現で賛美している。<sup>17)</sup> そして実際、当時のプロテスタント文学には、あたかも聖女であるかのように称えられた女性たちが頻繁に登場する。以下の頁では、こうした聖女性の文学伝統をふまえながら、劇の進行につれてますます崇高化されていく Hermione の人物像の変化に焦点を当てたい。

## II

1 幕では威勢よく Polixenes や Leontes を言い負かす Hermione であるが、Leontes により不義密通の罪で告発される 2 幕以降は、一転して苦難にひたすら耐える女性として描かれる。陽気で快活な女性から従順な妻へ

の Hermione の変化は、しばしば家父長制の確立という劇の流れと関連づけて解釈されてきた。無実を主張はするものの結局は夫の非道な仕打ちを受け入れる Hermione は、たしかに家父長制度における男性の権威を自主的に受容しているかのように見える。<sup>18)</sup> しかし、非常に興味深いことに、この劇をキリスト教的に解釈した場合、Hermione の忍従は全く別の意味を帯びてくるのである。例えば、Hermione は、Leontes によって投獄される前に「天がもっとお恵み深い様子を見せてくれるまで辛抱しなければ」「I must be patient till the heavens look / With an aspect more favourable」(II. i. 106-7) と言って、自分に同情して泣く女官たちを慰める。この場面は、嘆き悲しむ女性信者たちを諭す処刑前のキリストと比較される。<sup>19)</sup> また、公開裁判の席で Hermione は身の潔白を主張して死への恐怖を否定するが、これも同様に処刑直前のキリストの姿と重ね合わされる。<sup>20)</sup> このように、Hermione には、権威的な夫に対する妻の忍従と、キリストのような神の摂理に対する従順の双方が混在していることになる。

こうした Hermione の人物像は、貞節・従順といった伝統的には女性特有とされた資質をキリスト教的美徳に置き換えることにより女性の精神性を主張したルネサンス期の宗教文学の影響を示していると思われる。裁判の席で、Hermione は身の潔白を主張しながらも、夫の愛情を失い子供たちからも引き離された以上この世に一切の未練はないと語る。Roland Mushat Frye は、この場面における Hermione の死に対する態度を、現世への執着を戒めたプロテスタント的厭世観の表れと解釈している。<sup>21)</sup> しかし、Hermione のせりふをもう少し詳しく分析すると、この「死へのキリスト教的処し方 (the Christian art of dying)」が女性、とりわけ妻・母親の立場で強調されているのがわかる。例えば、Hermione は「私にとり生命は何の価値もない」「To me can life be no commodity」(III. ii. 93) に始まるせりふで、娘 Perdita を獄中で出産した後の回復も待たずに裁きの場に引き立てられたことを以下のように非難する。



with immodest hatred  
 The child-bed privilege denied, which 'longs  
 To women of all fashion; lastly, hurried  
 Here, to this place, i' th' open air, before  
 I have got strength of limit. Now, my liege,  
 Tell me what blessings I have here alive,  
 That I should fear to die? (III. ii. 102-108)

Hermioneは、シチリアの王妃やロシア皇帝の王女としてではなく、「あらゆる階級の女性」“women of all fashion”の一人としての怒り、哀しみを訴える。

16、17世紀には、信心深い女性の死をも恐れぬ態度を称えた作品が多数出版された。John Foxe は、*Acts and Monuments* の中で、Lady Jane Grey の殉教の様子をキリスト教徒の模範として劇的に描いている。<sup>22)</sup> また、Countess of Pembroke が翻訳した宗教詩には、毅然として死を受けとめた古代女性の例が列挙された。ストア哲学的な厭世観を女性の中に表現することにより、従順や寡黙といった伝統的な女性らしさの価値観を否定することなく一種の“female heroism”の理想が示されたという。<sup>23)</sup> より身近な一般女性を主人公とした作品としては、当時人気を博した Philip Stubbes の *A Christall Glasse for Christian Women* がある。これは、作者の妻 Katherine が出産後いかに死を恐れずに立派なキリスト教徒として死んでいったかを記したものであるが、Stubbes は産褥熱で死んだ敬虔な妻の死を聖女の最期のように描写している。女性の脆い肉体と対比された精神力や信仰心は、“a mirrour of woman hood”であるだけでなく“a perfect paterne of Christianitie”として呈示されているのである。<sup>24)</sup>

こうした宗教文学はいずれも、一般に「弱き器 (the weaker vessel)」とされた女性が死の恐怖を壮絶に克服する姿を描くことにより、信仰が人間に与える力を強調している。上で引用した Hermione のせりふにおいても、女性の弱さと強靱な精神力が明確に対比されているのがうかがえる。前半で

強調される産後のために衰弱した身体が、その後に続く死をも恐れぬ態度を一層果敢に見せる効果を挙げているのである。1 幕で Leontes や Polixenes によって表された女性の精神性・宗教心に対する伝統的な不信はここで否定され、Hermione はその死を信じる Leontes の心に「聖人のような魂」“sainted spirit” (V. i. 57) として蘇るのである。

聖者のような Hermione というイメージを Leontes に強く認識させるのは、Hermione を弁護し続ける宮廷女性 Paulina である。公然と Leontes を非難する Paulina は、Linda Woodbridge が “justifiable shrewishness” と分類するように、男性登場人物をやりこめるじゃじゃ馬の典型として解釈されることが多い。<sup>25)</sup> しかし、たしかに勝ち気な側面が目立つ Paulina も、Hermione と同様に聖賢な女性として描かれている。Hermione と Paulina の類似は多くの批評家によって指摘されているが、その効果の一つに挙げられるのは、二人が補足的な関係にあるということである。Hermione 不在の16年間にわたり、Paulina は Leontes の妻としての役割を果たすといっても過言ではない。Paulina は、Hermione に代わって、後悔の念にさいなまれる Leontes に精神教育を施し、信仰の道へと導くのである。

Paulina は、嫉妬で荒れる Leontes のもとを訪れ、“I / Do come with words as medicinal as true, / Honest, as either, to purge him of that humour / That presses him from sleep” (II. iii. 36-39) と語る。Leontes を改悛へと導く Paulina は、まさに癒しの言葉でもって司祭の役目を果たす。Paulina の名前と St. Paul の関連は、繰り返し批評家によって指摘されている。<sup>26)</sup> 例えば J. A. Bryant は、Paulina は Leontes に St. Paul の教義を説くと解釈している。とすれば、これは非常に皮肉な効果であるといえよう。なぜなら、St. Paul は、夫に対する妻の服従を説いたことで知られており、その婚姻・家族観は家父長制の根拠とされたからである。<sup>27)</sup> 「教会では女性を黙らせよ。女性は語ることが許されていない」“Let your women kepe silent in the Churches: for it is not permitted vnto them to speake” という St. Paul の言葉は、女性がとりわけ宗教について男性

に教示することを禁じる格好の根拠とされた。<sup>28)</sup> 弁舌を振るって Leontes の信仰心を目覚ます Paulina は、St. Paul を盛んに引用した当時の家父長主義的な家政論のパロディーとみることができるだろう。

Carolyn Asp は、Leontes の道徳的・宗教的な相談相手としての Paulina に注目しながらも、当時の社会で妻が夫を説得するということはあるえないという理由で、中世文学に登場する抽象的な概念を具現する女性を Paulina の原型と解釈している。<sup>29)</sup> しかし、Paulina に表される女性像は必ずしも16、17世紀の婚姻論に見当たらないわけではない。男女の上下関係が重んじられたにもかかわらず、妻が道徳的、宗教的に道を誤った夫を諭すことは禁じられてはいなかった。それどころかむしろ妻の義務の一つと見なされていたのである。結婚を論じた道德家は、信仰心の篤い女性が冒瀆の夫をもった場合を必ず想定している。そして、夫が明らかに神の教えに背いたふるまいをした場合、妻は神への信仰を優先して夫を矯正するべきであると説いた。聖職者 William Gouge は、*Of Domesticall Duties* の中で、「妻の服従の限度」“Of the extent of a wives obedience”と題した章をもうけ、神の教えに反してまで夫に仕える義務はないと明言している。<sup>30)</sup> このように、妻が場合によっては自分の信仰を貫く権利を与えられていることは、家父長制そのものの限界でもあった。

さて、劇の冒頭から妊婦の姿で登場する Hermione は、信心深い妻という側面に加えて、母親としての強さを観客に深く印象づける。Hermione が一貫して放つ強烈な母性は従来のフェミニスト批評家の関心を集めながらも、母性に対する Leontes の潜在的恐怖や嫉妬との関連で精神分析的に論じられる傾向がある。しかし、息子 Mamillius や娘 Perdita に対する Hermione の愛情は明らかであり、母子間の精神面、愛情面でのつながりを最後に吟味したい。

2幕1場で Mamillius をあやしていた Hermione は、逆上した Leontes により息子から引き離されて投獄される。母親の不幸に傷心した Mamillius の急死が裁判の席で報じられると、Hermione は気を失って別室に運ばれ、

まもなくして Paulina は Hermione も死んだことを Leontes に知らせる。そして、最終場で初めて、Hermione が実は16年間娘が発見されるのを待ち続けていたということが、登場人物はもちろん観客にも明らかにされるわけである。Mamillius の死は、家庭の崩壊、家父長制の破綻、あるいは Leontes が犯した罪に対して神が下した天罰というように、多様な解釈が可能であろう。しかし、初期近代における幼児の死亡率の高さを考えると、若い長男の死は当時の観客にとっては象徴であると同時に現実問題でもあったに違いない。<sup>31)</sup> James 一世も *The Winter's Tale* を観劇した頃には、二人の王女 Mary と Sophia、そして長男 Henry の死を経験している。<sup>32)</sup> 二人の子供をほぼ同時に失った Hermione は現世との一切の交渉を断ち隠遁生活を送ることになるが、子供の喪失による精神的打撃が転機となって信仰生活に入るルネサンス女性は実際少なくなかった。<sup>33)</sup>

最終場で、16年前に捨てられた Hermione の娘 Perdita が見つかって無事に Leontes との再会を果たすと、Paulina は一行を自邸の礼拝堂へと案内し、Hermione の彫像を見せる。初めて見る母親の姿に感動した Perdita は、“do not say 'tis superstition, that / I kneel, and then implore her blessing” (V. iii. 43-44) と言う。Perdita が彫像の前に膝まづくという行為を盲信ではないとわざわざ弁解しているとする、ここでの Hermione は明らかに教会に安置された聖母マリア像を演じていることになる。<sup>34)</sup> このことは、悲劇の発端とも言える1幕2場の Hermione と Polixenes のやりとりを思い起こすと興味深い。楽園喪失の原因を作ったイブの烙印を押された Hermione は、最後に聖母像の姿で登場するのである。

中世においては処女性・貞節の象徴とされたマリアは、ルネサンス期になると妻・母親の究極の理想とされるようになった。<sup>35)</sup> 例えば、修道院制度批判に関連して結婚生活を高く評価した Erasmus は、処女としてのマリアではなくキリストの母親としてのマリアを賛美したが、これはプロテスタント結婚論の常套となった。<sup>36)</sup> 息子への宗教的訓戒を *The Mother's Blessing* として出版した Dorothy Leigh は、イブが犯した罪を贖ったマ

リアを以下のように母親の鑑として称えている。

I presumed that there was no woman so senceless as not to look what a blessing God hath sent to us women through that gracious Virgin, by whom it pleased God to take away the shame which Eve, our grandmother, had brought to us. For before, men might say, “The woman beguiled me, and I did eat the poisoned fruit of disobedience, and I die.” But now man may say, if he say truly, “The woman brought me a Savior, and I feed on him by faith, and live.”<sup>37)</sup>

ルネサンス期の聖母マリア崇拜は結婚論における聖賢な妻・母親への憧憬に見出されることが多い。子供への宗教的訓戒を著した17世紀前半の女流作家たちは、イヴの罪を贖う聖母の役割を自ら果たすことを意識していた。<sup>38)</sup> 聖母マリアとその聖家族は、信心深い女性が司る結婚・家族生活の何よりの模範とされたのである。

Paulina は「信仰を呼び覚ましてください」「You do awake your faith」(V. iii. 95) と命じると、おごそかに彫像の蘇りを宣言する。それまで彫像と思われていた Hermione は、Paulina の合図でゆっくりと動きだし、感極まる夫 Leontes を抱擁する。そして、敬虔な妻の「復活」後の第一声は先ず天に向かって発せられる。「神々よご照覧あれ、そしてその聖なる器より我が娘に祝福を注ぎたまえ」「You gods, look down, / And from your sacred vials pour your graces / Upon my daughter's head!» (V. iii. 121-3) これは、Polixenes の息子 Florizel との婚約が整った Perdita に対する、母親としての祝福の言葉でもあろう。こうして、神の恩寵としての結婚は、母から娘へと受け継がれていくのである。非道な仕打ちを受けても結局は夫を許す Hermione に家父長制の再生という影を読みとることは無論妥当であるかもしれない。しかし、以上みてきたように、劇の主眼は、家父長制よりもむしろそれを抑制する神聖家族の理念に置かれているのである。

- 1) Shakespeare 作品のフェミズム批評の経緯については、“The Family in Shakespeare Studies; or — Studies in the Family of Shakespeareans; or — The Politics of Politics, *Renaissance Quarterly*, 40 (1987), 707-742 を参照のこと。
- 2) Shakespeare 劇における家父長制の概念に関する研究については、例えば、Peter Erickson, *Patriarchal Structures in Shakespeare's Drama* (Berkeley: U of California P, 1985); Marilyn L. Williamson, *The Patriarchy of Shakespeare's Comedies* (Detroit: Wayne State UP, 1986) 等を参照。
- 3) 家庭宗教と女性の活躍に関する歴史研究については、以下の資料を参照。Patrick Collinson, “The Role of Women in the English Reformation Illustrated by the Life and Friendships of Anne Locke,” in *Godly People: Essays on English Protestantism and Puritanism* (London: Hambledon, 1983), pp. 273-288; Margo Todd, *Christian Humanism and the Puritan Social Order* (Cambridge: Cambridge UP, 1987), pp. 96-117; Diane Willen, “Women and Religion in Early Modern England,” in *Women in Reformation and Counter-Reformation Europe*, ed. Sherrin Marshall (Bloomington, Indiana: Indiana UP, 1989), pp. 140-165; Linda Pollock, *With Faith and Physic: The Life of a Tudor Gentlewoman Lady Grace Mildmay* (London: Collins & Brown, 1993), pp. 48-69.
- 4) Carol Thomas Neely, “Women and Issue in *The Winter's Tale*,” *Philological Quarterly*, 57 (1978), 181. 同様の解釈に、Patricia Southar Gourlay, “‘O my most sacred lady’: Female Metaphor in *The Winter's Tale*,” *English Literary Renaissance*, 5 (1975), 375-395がある。
- 5) Erickson, p. 148.
- 6) *The Winter's Tale* のキリスト教的解釈に関しては、例えば、S. L. Bethell, *The Winter's Tale: A Study* (New York: Staples, 1947);

- J. A. Bryant, Jr., *Hippolyta's View: Some Christian Aspects of Shakespeare's Plays* (U of Kentucky P, 1961), pp. 207-225; Robert Grams Hunter, *Shakespeare and the Comedy of Forgiveness* (New York: Columbia UP, 1965), pp. 184-203; S. R. Maveety, "What Shakespeare Did with *Pandosto*: An Interpretation of *The Winter's Tale*," in *Pacific Coast Studies in Shakespeare*, eds. Waldo F. McNeir and Thelma N. Greenfield (Eugene, Oregon: U of Oregon P, 1966), pp. 263-279; Roy Battenhouse, "Theme and Structure in *The Winter's Tale*," *Shakespeare Survey*, 33 (1980), 123-138等がある。
- 7) *The Winter's Tale* からの引用は、J. H. P. Pafford, ed., *The Winter's Tale*, The Arden Edition, (London: Routledge, 1966) による。
- 8) Gourlay, 375-377.
- 9) 宗教界に流布していた、結婚に対する不信と恐怖に関しては、Thomas N. Tentler, *Sin and Confession on the Eve of the Reformation* (Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1977), pp. 223-232; Ian Maclean, *The Renaissance Notion of Women: A Study in the Fortunes of Scholasticism and Medical Science in European Intellectual Life* (Cambridge: Cambridge UP, 1983), pp. 16-17参照。
- 10) Ercole Tasso, *Of Marriage and Wiuing*, trans. R. T. (London, 1599), G.
- 11) Steven Ozment, *When Fathers Ruled: Family Life in Reformation Europe* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1983), pp. 9-12.
- 12) Valerie Traub, *Desire and Anxiety: Circulations of Sexuality in Shakespearean Drama* (London: Routledge, 1992), pp. 42-43.
- 13) Bryant, Jr., pp. 203-205.
- 14) Willen, pp. 147-152.
- 15) C. L. Barber, "The Family in Shakespeare's Development: Tragedy and Sacredness," in *Representing Shakespeare: New Psychoanalytic Essays*, eds. Murray M. Schwartz and Coppélia Kahn (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980), p. 188.
- 16) Betty Travitsky, *The Paradise of Women: Writings by*

- Englishwomen of the Renaissance* (New York: Columbia UP, 1989), pp. 17-18.
- 17) Henry Smith, *A Preparative to Marriage, The English Experience* (1591; Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1975), 28.
  - 18) Erickson, p. 162.
  - 19) Battenhouse, 126.
  - 20) Bryant, pp. 210-212.
  - 21) Roland Mushat Frye, *Shakespeare and Christian Doctrine* (Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1983), p. 133.
  - 22) Carole Levin, "Lady Jane Grey: Protestant Queen and Martyr," in *Silent But for the Word: Tudor Women as Patrons, Translators, and Writers of Religious Works*, ed. Margaret Patterson Hannay (Kent, Ohio: Kent State UP, 1985), pp. 92-106; "John Foxe and the Responsibilities of Queenship," in *Women in the Middle Ages and the Renaissance*, ed. Mary Beth Rose (Syracuse: Syracuse UP, 1986), pp. 113-133.
  - 23) Mary Ellen Lamb, "The Countess of Pembroke and the Art of Dying," in *Ibid.*, pp. 207-226.
  - 24) Philip Stubbes, *A Christall Glasse for Christian Women* (London, 1618), A2.
  - 25) Linda Woodbridge, *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620* (Urbana: U of Illinois P, 1986), p. 198.
  - 26) Bryant, p. 216; Battenhouse, 137.
  - 27) Constance Jordan, *Renaissance Feminism: Literary Texts and Political Models* (Ithaca: Cornell UP, 1990), pp. 25-26.
  - 28) 1 Cor, 14: 34, *The Geneva Bible: A Facsimile of the 1560 Edition* (Madison: U of Wisconsin P, 1969).
  - 29) Carolyn Asp, "Shakespeare's Paulina and the Consolatio Tradition," *Shakespeare Studies*, 11 (1978), 145-158.
  - 30) William Gouge, *Of Domesticall Duties: Eight Treatises* (London,



1622), 340.

- 31) 初期近代英国社会における乳幼児の死亡率の高さについては、Ozment, pp. 166-170; Peter Laslett, *The World We Have Lost: further explored*, 3rd ed. (London: Routledge, 1983), pp. 111-2.
- 32) David M. Bergeron, *Shakespeare's Romances and the Royal Family* (Lawrence, Kansas: UP of Kansas, 1982).
- 33) Patricia Crawford, *Women and Religion in England, 1500-1720* (London: Routledge, 1993), p. 142.
- 34) C. L. Barber は、この最終場を “the discovery of the Holy Mother in the wife” と解釈し、妻に聖母の面影を求める Leontes を精神分析的に解釈している。C. L. Barber, “‘Thou that beget’st him that thee did beget’: Transformation in *Pericles* and *The Winter’s Tale*”, *Shakespeare Survey*, 22 (1969), 66. また、青山誠子氏は、Hermione の彫像姿と、それに続く Leontes と Hermione の抱擁シーンは、「一幅の宗教画を思わせるものがある」と指摘している。青山誠子『シェイクスピアの女たち』(研究社、1981) pp. 187-188.
- 35) 宗教改革以前の聖母マリア信仰や聖女崇拜については、Eamon Duffy, “Holy Maydens, Holy Wyfes: The Cult of Women Saints in Fifteenth- and Sixteenth- Century,” *Studies in Church History*, 27 (1990), 175-196を参照。
- 36) Erasmus, “An Epistle to Perswade a Young Gentleman to Marriage, Deuised by Erasmus in the Behalfe of His Frende,” in *The Art of Rhetorique*, Thomas Wilson, The English Experience (Amsterdam: Da Capo, 1969), fol. 24.
- 37) Joan Larsen Klein, ed., *Daughters, Wives, and Widows: Writings by Men about Women and Marriage in England, 1500-1640* (Urbana: U of Illinois P, 1992), p. 289.
- 38) Elaine V. Beilin, *Redeeming Eve: Women Writers of the English Renaissance* (Princeton, New Jersey: Princeton UP, 1987), pp. 247-248.